śraddhā́-，*crēdō* の語義と語形について

後　藤　敏　文

印度学宗教学会　論集　第34号別刷

平成19年　2007年12月
[2008年10月]

śraddhā́-，crēdō の語義と語形について

後　藤　敏　文

印度学宗教学会第48回学術大会の公開パネルディスカッション「信仰と解脱」（仙台，2005年5月28日）における報告に基づき，要点のみ以下に記録する。

1．古インド語文献における śraddhā́-，śrád dhā

古インドアーリヤ語 *śraddhā́-*（動詞語形 *śrád dhā*）は「信を置くこと，信頼」一般の意味であって，それがどのような文脈で用いられているかは，それぞれの場合による。宗教的意味で用いられる場合にも，その使用される環境に左右されている。宗教の根幹に関わる部分があるだけに，はっきりとした色づけが出ることは考えられるが，語義的意味内容そのものは一貫して「信を置くこと，信ずること」である。

後の叙事詩および古典サンスクリット文献，中期インドアーリヤ語（プラークリット）においては，「信頼，確信」の他，「欲求」の意味でも用いられ，現代インドアーリヤ語では専らこの意味で使用されているようである。しかし，「欲求」という意味ないし用法はヴェーダ文献には無く，古く遡らない。二次的な展開と考えられる。Köhler（→８．）p.7は，古アヴェスタ語の Yasna 43,11の解釈に基づいて[1]，この語義を古いものと仮定し，ブラーフマナ文献に見られる *yathāśraddhám* をも後の *yathāśraddham*「望みのままに，好きなように」の意味で解そうとするが（例えば，*dákṣiṇā-*「布施，報酬」の量を「望みに従って」などと解釈），根拠がない。Yasna 43,11 については 2.1. に見るとおりである。動詞語形は一貫して「信を置く，信ずる，信頼する」の意味で用いられる。Köhler の書にはヴェーダ文献中の出典箇所の殆どが取り上げられており，資料集として便利である[2]。

1　さらに新アヴェスタ語の Yasna 25,6, Yašt 10,9 を箇所のみ挙げる。

1.1. 動詞語形 *śrád dhā*

1.1.1. リグヴェーダ［RV］には，動詞語形が計7回現れる。6カ所がインドラ，1カ所がアシュヴィン讃歌中である：*śrád ...dadhāmi* X 147,1, *...dhattana* I 103,5, *...dhatta* II 12,5, *...dádhat* X 39,5（*yáthā*), *adhāyi* I 104,7 ; *śrád-dadhati* I 55,5, *śrad-dádhāna-* I 103,3；さらに，Inf. *śrad-dhé kám* [3] I 102,2, VAdj. *śráddhita-* I 104,6。他に *śrád* は，目的語として，使役形（Kausativ）*dhāpaya* とともに（X 151,5, → 1.2.1.），乃至 *kar/kr̥* とともに（*śrád ... kr̥dhi* VIII 75,2, 下に引用） 現れる。

śrád＋*dhā* の格支配としては，与格（Dativ）との結合が挙げられる。例えば I 103,5 *śrád índrasya dhattana vīryā̀ya*「[君たちは］インドラの勇猛さに信を置け」，I 104,6 *śráddhitaṃ te mahatá indriyā̀ya*「君の偉大なインドラの力に信が置かれた」 同 7 *ádhā manye srát te asmā adhāyi*「そこで，私は思う。そういう君に(今まさに)信が置かれた」。——II 12,5 は構文上「神を信ずる」(‘glauben’) と解釈することも可能ではあるが，ここでも「信を置く」(‘vertrauen’) が考えられていると思われる：*yáṃ smā pr̥cchánti kúha séti ghorám* ǀ *utém āhur náiṣo*

---

2 KÖHLER は OLDENBERG および LÉVI の見解を p.8f. に次のように要約している：OLDENBERG は *śraddhā* を「ひとを贈与（布施）に向かわせる心理状態」die zum Geben treibende Seelendisposition の意味で認めている（Religion des Veda, [1]1894, 565 n.3...)。彼はヴェーダ文献の複数層から出典を挙げ，それらに，「信仰に基づく（当然，贈与という形で証明される）信頼」gläubiges（natürlich in Gaben sich beweisendes）Vertrauen，さらに，「祭官たちと彼らが行う祭式行為がもつ神聖な力に対する確信」Zuversicht zur heiligen Karft der Priester und ihres Opferns（Die Lehre der Upanishaden, [1]1915, 203 n.2...)，「贈与することと結びついた恵みへの，とりわけ，贈与の受け手がもつその恵みを保証する職の重みへの信頼」Vertrauen auf den Segen, der mit dem Geben verknüpft ist, und insonderheit auf die diesen Segen gewährleistende Würdigkeit des Empfängers（Die Weltanschauung der Brāhmaṇa-Texte, 1919, 215 n.4）の意味を設定している。S. LÉVI は「神々へのではなく，祭式固有の力の存在とそれを実行する祭官たちへの信頼」Vertrauen, nicht auf Götter, sondern in die eigentlichen Kräfte des Opfers und auf die es vollziehenden Priester という結論に達している（La doctrine du sacrifice dans les Brāhmaṇas 108–122)。これに対し GELDNER は神々（への信頼）をも含めている（Vedismus und Brahmanismus, 1908, 118 n.7)。—— 最後の GELDNER の指摘は，文献層の違いを，少なくともその表現面における違いを反映している；HACKER WZKSO 7 188f. ＝ Kl.Schr. 474f. “Summary”をも参照。

3 S. SCARLATA（→８.）263参照：他の *-é* に終わる Inf.（*śubhé*, *dr̥śé* など）に倣ったもの。*-ā* に終わる語根からの Dat.-Inf. は規則的に °*ái*。

astā́tᵢy enam | só aryáḥ puṣṭī́r víja ⁱvā́ mināti ¹ śrád asmai dhatta sá janāsa índraḥ「[ひとびとが] 彼のことを『どこに彼はいるか』といつでも尋ねる恐ろしい者，そして，[ひとびとが]『この者はいない』と言っている当の者，彼は，だが，敵の繁栄（富）を，賭け金のように減らす。（君たちは）彼に信を置け。彼が，人々よ，インドラだ」。

例外として，I 103,3 に対格（Akkusativ）が現れる：sá jātū́bharmā śraddádhāna ójaḥ ¹ púro vibhindánn acarad ví dā́sīḥ「彼（インドラ）は，生まれつき包容力を持ち，[自らの] 肉体力 [こそ] を信と定めながら，城塞（防御壁）を破り壊しつつ進んだ，ダーサに属する [城塞] を [破り] 壊し [ながら]」。śrád-dhā が「(を) 信ずる，頼みとする」という一語に展開していた可能性が考えられる。パーリ語（→1.8.），新アヴェスタ語（→2.2.）における Akk. 支配を参照のこと。

絶対用法，または Dativ が省略された用法と解される例もある：X 39,5 tā́ vāṃ nú návyāv ávase karāmahe ¹ 'ₐyáṁ nāsatyā śrád arír yáthā dádhat「そこで君たち両者を，今 [我々への] 助力のために，新たな者たちと我々は為そう。ここにいる族長が，両ナーサッティヤよ，[±君たちに] 信頼を置くことになるように」。[4]

さらに，**śrád kar/kr̥** が一度現れる：VIII 75,2 utá no deva devₐā́ṁ ¹ áchā voco vidúṣṭaraḥ | śrád víśvā vā́ryā kr̥dhi「そして，神（アグニ）よ，我々のために，よりよく知っている者として，神々に向かって語れ。あらゆる望ましいものたちを，信となせ」。正確な意味は明らかでない。いずれにせよ śrád は中性単数 Akkusativ と考えられる。[5] idam as/bhū 構文の使役形（faktitiv）に当たる kar/kr̥ 構文の可能性も考えられる：[6]「あらゆる望ましいものたちを，信を管轄するものとなせ」，あるいは，中性複数形 ＋ as/bhū の構文を想定して「信を，あらゆる好ましいものたちを管轄・支配するものとなせ」。śrád ...dhāpaya について，X 151,5 参照（→ 1.2.1.）。

---

4 堂山英次郎『リグヴェーダにおける1人称接続法の研究』（大阪大学 2005）284参照。
5 hŕ̥d-「心臓」が中性名詞であることをも参照。
6 後藤敏文「荷車と小屋住まい：ŚB śālām as」印度学仏教学研究55-2 (2007), 805, n.16, “Reisekarren und das Wohnen in der Hütte : śālām as im Śatapatha-Brāhmaṇa”, Gs. Elizarenkova（印刷中）, n.24, “Funktionen des Akkusativs und Rektionsarten des Verbums –anhand vom Altindoarischen–”, Indogermanische Syntax –Fragen und Perspektiven– (Wiesbaden 2002), 31f. 参照。

1.1.2. ヤジュルヴェーダ・サンヒター，ブラーフマナにおいても，事情は異ならない。例えば: Vājasaneyi-Saṁhitā VIII 5（マントラ）*śrád asmai naro vácase dadhātana*「このことばに，男たちよ，信を置け」; Maitrāyaṇī Saṁhitā III 6,3^{p}: 62,10（散文）*satyám̐ vái cákṣur. néva vācé śráddadhāti*「視覚は真実なのだ。ことばには，まさしく，信を置かない」。Jaiminīya-Brāhmaṇa I 151:4 *śraddhāya*「……と信じて」(事実上誤解して)。

1.2. 名詞 *śraddhā́-*

RV には計20回現れる。いずれも，語根活用ではなく，Suffix *-ā-* による語幹の活用を示す: Nom. Sg. -φ，Instr. °*áyā*: ＜ **k̂réd-d^{h}h$_{1}$-éh$_{2}$-*。S. Scarlata（→ 8.）262f. 参照。語根活用の場合には，本来，Nom. Sg. に *-s* が，Instr. Sg. に **śraddhā́* が求められるが，女性の語根名詞，特に行為名詞の実体詞の場合，二次的に *-ā-* 語幹に移行したと考えられる場合も稀ではない，cf. Lanman JAOS 10 (1877) 444, 447, Wackernagel-Debrunner AiG III 126, 128。意味は動作を意味する実体詞「信を置くこと，信頼」である。例えば，I 108,6 *yád ábravam prathamáṃ vāṃ vr̥ṇānò* ¦ *'$_{a}$yáṁ sómo ásurair no vihávyaḥ* | *tā́ṃ satyā́ṃ śraddhā́m abh$_{i}$y ā́ hí yātam* ¦ *áthā sómasya pibataṃ sutásya*「私が，今しがた，君たち［両神］を選び取りながら，『ここにあるソーマは，我々がアスラたちと呼びかけ競うべきものだ(このソーマによってインドラとアグニとをアスラたちに取られることなく祭場に呼ぼう)』と言ったこと，この真実の（実現する）信頼へ向かって駆けつけてこい」。そうして，搾られたソーマを飲め」。

ただし，語根活用（Nom. Sg. °*ā́s*）の行為者名詞と解釈が可能な用例が一例ある。その場合，語頭の子音の問題をひとまず置けば（→ 5.5.）アヴェスタの *zrazdā-* ＜ **k̂réd-d^{h}eh$_{1}$-*「信を置く，信頼している」（'vertrauend'）に対応することになる: VII 32,14 *śraddhā́ ít te maghavan pā́rye diví vājī́ vā́jaṃ siṣāsati*「君にまさしく信を置く者として，有能者よ，向こう側に属する日（新年）に，競争の勝者として［戦車］競争を勝ち取りたい」。しかし，*śraddháyā* と並んで，Instr. Sg. *śraddhā́* は可能であり，「君への信頼によって」と解釈することを妨げない。

1.2.1. RV X 151（全5歌）は Śraddhā を讃える讃歌である。祭官詩人たちが，

報酬（*dákṣiṇā-*）を払う祭主たちの *śraddhā́-*「信，信頼」を大いに得て，祭式に与れるよう，神格化された Śraddhā そのものに命令形で歌い懸ける讃歌である。[7] 特に語の分析への手がかりが得られるわけではない：

1. *śraddháyāgníḥ sám idhyate* ˡ *śraddháyā hūyate havíḥ* | *śraddhā́m bhágasya mūrdháni* ˡ *vácasā́ vedayāmasi* ‖ 2. *priyám śraddhe dádataḥ* ˡ *priyám śraddhe dídāsataḥ* | *priyám bhojéṣu yájvasuv* ˡ *idám ma uditáṃ kr̥dhi* ‖ 3. *yáthā devā́ ásureṣu* ˡ *śraddhā́m ugréṣu cakriré* | *evám bhojéṣu yájvasuv* ˡ *asmā́kam uditáṃ kr̥dhi* ‖ 4. *śraddhā́ṃ devā́ yájamānā* ˡ *vāyúgopā úpāsate* | *śraddhā́ṃ hr̥dayyàyā́kūtyā* ˡ *śraddháyā vindate vásu* ‖ 5. *śraddhā́m prātár havāmahe* ˡ *śraddhā́m madhyáṃdinam pári* | *śraddhā́ṃ sū́ryasya nimrúci* ˡ *śráddhe śrád dhāpayehá naḥ* ‖

1. *ś* を伴って，アグニは燃え立たせられる。
ś を伴って，供物は献供される。
[自らへの] *ś* を分配の［神の］頭頂において，
ことばによって，我々は知らしめる。

2. ［布施を］与える者に，*ś* よ，好ましいものと，
［布施を］与えようとする者に，*ś* よ，好ましいものと，
有益な祭る者たちの間に，好ましいものと，
私によって語られた，このことを成せ。

3. ちょうど神々が，強力なアスラたちの間に，
ś を作った（惹き起こした）ように，
そのように，有益な祭る者たちの間に，
私たちによって語られたことを成せ。

4. *ś* を，祭式を行うとき，
風を守護者（牛飼い）とする神々は，崇める。
ś を，心臓にある意図によって，（そしてその）
ś によって，物を，［ひとは］見出す（自らのものとする）。（→ 1.5.）

5. *ś* を，朝，我々は呼ぶ，

---

7 Geldner 同讃歌への前書きから：「Ś は神々への確信に満ちた信仰 Glaube であり，祭官たちの力と宗教慣習に対する祭主たちの信頼 Vertrauen，祭官たち，讃歌を歌う者たちの，祭式依頼者の真摯さへの信頼である」。

8 *vedayāmasi* の Medium がもつ affektiv「我々のために」の価値をこう訳す。

ś を，正午を巡って，

ś を，太陽が没するときに。

ś よ，*śrád* を，ここ（地上）において，我々に置かせよ。

最終詩節の使役形 *śráddhe śrád dhāpayehá naḥ*「*śraddhā́*- よ，ここ（地上）において，（ひとびとの）信を，我々の上に置き定めさせよ」は，*śráddhā́*- の語を解き開いて使役形で表現したものであり（「信頼させよ」），*śrád* が当時生きた意味を持っていたことを保証するわけではない。VIII 75,2（→ 1.1.1.）における *śrád ... kr̥dhi* をも参照して，突き詰めて言えば，*śráddhā́*- は「信を置くこと」，*śrád* はその置かれるべき「信」に当たる。なお，*dhāpáya-*[ti] は語根 *dhā*「置く，定める」の使役語幹としては唯一のものであり，アタルヴァヴェーダ［AV］以来一般的であるが，RV ではここにのみ現れる。

1.2.2. *śraddhā́*-から作られた Bahuvrīhi 複合語に *aśraddhá*-「信頼をもたない，信じない」があり，Paṇi たちについて用いられている（VII 6,3）。*śraddhivá*-「信頼するに足る」（X 125,4）は *śrad*＋*dhā́* の弱形から Suffix *-vá*- によって作られた名詞（形容詞）である（～ AV IV 30,4 *śraddhéya*-「信の置かれるべき」）。

1.3. *śraddhā́*- と真実 *satyá*- とが RV IX 113にソーマ（Soma）について並記されている：2. *r̥tavākéna satyéna śraddháyā tápasā sutáḥ*「正しい発言によって，真実［を語ること］によって，信を置くことによって，苦行（肉体的努力）によって搾られた」；4. *r̥tám vádann r̥tadyumna* | *satyám vádan satyakarman* | *śraddhā́ṃ vádan soma rājan* | *dhātrā́ soma páriṣkr̥táḥ*「天理に叶うことを音にしながら，天理に輝く者よ，真実（実現すること）を音にしながら，行為の実現する者よ，『信ずること』を音にしながら，王ソーマよ，［君は］創造者によって，ソーマよ，完璧にされた」。*śraddhā́*-「信を置くこと」とは，突き詰めれば，「ことが実現すること」，つまり，*satyá*- であること[9] に信を置くことである：*satyā́*-

9 *satyá*-「真実在の，現実にあっている；実現する，実現力をもつ；永遠に存続する」については，後藤敏文『今西順吉教授還暦記念論集「インド思想と仏教文化」』（1996）857, Langue, style et structure dans le monde indien. Centenaire de Louis Renou（1996［1997］）77,「サッティヤとウースィア」『古典学の再構築』ニューズレター第9号（2001）34 参照

śraddhā́-「実現する信頼」I 108,6（→ 1.2.）。RV 以降の文献について，Hacker（→ 8.）170 = 456 は Köhler の挙げない AiBr VII 10,4 を引く：*śraddhā patnī satyaṃ yajamānaḥ. śraddhā satyaṃ tad ity uttamaṃ mithunaṃ. śraddhayā satyena mithunena svargām̐l lokāñ jayati*「*ś* は夫人である。*s* は祭主である。*ś*［と］*s*，というのが最上の一番（つがい）である。*ś*［と］*s*［という］一番によって，ひとは天界を勝ち得る」。彼は同所および 189 = 475 において，*śráddhā-* と *satyá-* がしばしば一組で挙げられると述べているが，具体的な出典の事情は不明である。

1.4.　*śraddhā́-* と思考 *mánas-* との関係を伺わせる用例があり，*śraddhā́-* が概念形成作用に関わるレベルの問題であることを示している：[10] RV II 26,3 *śraddhā́manas-*「そのひとの思考が信を置くこと，信念に基づく；信ずる思考をもった」，X 113,9 *śraddhāmanasyā́-*「信念に基づいて思考を形成すること，考えること」。黒ヤジュルヴェーダ・サンヒターのブラーフマナ部分には，水たちと同置される *śraddhā́-* を思考作用が包摂しうることを論ずる箇所がある：MS I 4,10ᵖ：59,2 ～ KS XXXII 7：26,15 *yó vái śraddhā́m ánālabhya yájate pā́pīyān bhavaty. ā́po vái śraddhā́. ná vā́cā gr̥hyante ná yájuṣā́. -áti vā́ etā́ vā́cam nédanti áti vártaṃ. mánas tú nā́tinedanti. yárhy apó gr̥hṇīyā́d*（*gr̥hīṣyan syād*）*imā́ṃ tárhi mánasā dhyāyet*「*śraddhā́-* を捕まえないで祭式をする者は，より悪くなるのだ。*śraddhā́-* は水たちなのだ。［水たちは］ことばによって捕まえられない，［つまり］ヤジュス（祭詞）によっては。彼女たちはことばを越えて溢れる，堤を越えて［溢れる］。しかし，思考を越えては溢れない。水たちをつかむ（つかもうとする）場合には［いつでも］これ（*śraddhā́-*）を思考によって念ずべきである（ヤジュスを口に出さないで唱えよ）」。信念はことばによって表しきれないが，思いの中に収まることを謂うものであろう。平行箇所 TS I 6,8,1 では *śraddhā́-* が *mánas-* と等置される文が加わるに至る：*iyáṁ vái mánaḥ*「思考はこれ（*ś*）なのだ」，阪本（後藤）純子，本誌論文 § 4.3. 参照。→ 5.5.。*śrad* + *dhā* と比較すべき**manas* + *dhā* の造語法については，→ 7.。

10　Hara IIJ 7（→ 8.）139f., 142："an impersonal and neutral principle as the object of *śráddhā*", "intellectual aspect of *śráddhā*" 参照。

1.5. 心臓 *hŕ̥d-*，*hŕ̥daya-* との関係については，RV X 151,4（→ 1.2.1.）が一つの手がかりを与える：*śraddhā́ṃ hr̥day*$_{i}$*yày*$_{a}$*ā́kūtyā* | *śraddháyā vindate vásu*「心臓にある意図（計画）によって *śraddhā́-* を，*śraddhā́-* によって財物を［ひとは］手に入れる」。心臓は意志の力（*krátu-*）の座であり（V 85,2）[11]，意志の実現には信念が必要である，という意味が看取される；→ 5.5., 6 .。

1.6. ブラーフマナ文献における展開

śraddhā́- は祭式の完成・実行に不可避の構成要素として確立する。RV の「*śraddhā́-* の歌」X 151（→ 1.2.1.）に既にその傾向が看取されることを Geldner, Köhler は強調している。Köhler は，祭式のメカニズムへの「信頼」を，その具体的現れ，いわば祭官たちの「本音」である“Hingabe”，“Spendefreudigkeit”（心を込めること，お布施をはずむこと）の次元に引きつけて議論しすぎる恨みがあり，諸処に見られる正鵠を得た指摘にもかかわらず（例えば，p.31：「神々への信頼」はもはやどこにも見られず，祭官学者たちは「祭式のもつ諸力を信頼すること」の意味に再解釈した），「祭式と布施の効果」（*iṣṭāpūrtá-*）をめぐる祭式理論構築の構造を十分に理解していない。語の意味自体はヴェーダ文献を通じて，一貫して「信頼」（何かあるもの・ことへの強い確信）である。この文脈で，（祭官の）*krátu-*「意志の力，念力」（心臓に宿る，→ 1.5.）と関わらないことには注意を要する。無論，「人が祭官を信ずる」という普通の文も存在する：TB III 11,8,9[P] *átha yádīcchéd bhū́yiṣṭhaṃ me śraddadhīran bhū́yiṣṭhā dákṣiṇānayeyur íti*「次に，［ひとびとが］私に最も多く信を置いてほしい，最も多くの報酬をもってくるように（引いてくる：報酬は牛たちから成る）と望むことがある場合には……」。

阪本（後藤）純子が明らかにしたように，[12]「祭式と布施の効果」（*iṣṭāpūrtá-*）が，死後天界において確実に本人の手に戻ることを保証し，これを巡る議論を

11 注20参照。後の文献における，心臓の中の「欲望」BĀU IV 4,7[V] *kā́mā yò 'sya hr̥dí śritā́ḥ*，「渇望，渇愛」Uttarajjhāyā XXIII 45－48（*taṇhā-*：心臓の中に生えた毒のある果実をつけた蔓草）をも参照。

12 阪本（後藤）純子『今西順吉教授還暦記念論集「インド思想と仏教文化」』（1996）882－862, Junko Sakamoto-Gotō “Das Jenseits und *iṣṭāpūrtá-* ‘die Wirkung des Geopferten-und-Geschenkten’ in der vedischen Religion”, Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik, Erlanger Tagung 1997（2000）475－490参照。

中核として形成されていったブラーフマナの祭式理論において，*śraddhā́-* の果たす役割は大きい。祭官は密かに祭主の不利になることをもなし得る。そのため，信頼できる祭官に祭式を依頼することが必須であり，祭式を担当する祭官が唱えるマントラと行う所作とを，正しく監督・監視できる祭式専門家を常に脇に置いておく必要があった。ここに，祭式を監督するブラフマン祭官（*brahmáṇ-*）の役割があり，部族長や王家にあっては，家内，王室内の呪術師，治療師，相談役としての Atharvaveda 系祭官が筆頭祭官（*puróhita-*）として重用されていったものと推測される。*śraddhā́-* は，正しいマントラ，行作，式次第の執行と，それが構築し実現するメカニズムへの信頼，確信であるが，祭主とブラフマン祭官との間の一蓮托生というべき信頼関係に集約される。ただし，ヴェーダ祭式の中核をなすこの理屈が直接文献に語られるわけではない。

古代インドの世界観で注意しておくべきことの一つに，概念を具体的な物で置き換えることによって祭式のメカニズムに組み込み，処理するという思考方法があり，このことも考慮しておく必要がある。*śraddhā́-* も，当然，物体（エネルギー）と捉えられており，「祭官が *ś* を見出す（獲得する）」JB III 23f., PB XII 11,25,「*ś* が入り込む」TB III 11,8,1^p^～ KaṭhUp I 2（ナチケータスの物語），「*śraddhā́-* が祭官を見出す（獲得する）」VādhAnvākh IV 51（IV 31,1, Caland No.75 : 192,2）などといわれる。「信頼を受ける」意味で Gerundiv *śraddhānīya-* も用いられる : JB II 426, III 23 ; JB II 218, 290, III 24, 例えば，*śraddhānīyā me prajā brahmavarcasinī syād*「私の子孫が信頼を置かれる者，祭官の能力に富む者となるように」II 218。

ブラーフマナ文献における *śraddhā́-* を巡る議論の中には，これから解明されるべき重要事項が多く残されているが，問題提起の意味で列挙しておきたい :

1） *śraddhā́-* と水たちとの同置 : 例えば，MS IV 1,4^p^ : 5,18 *yó vái śraddhā́m ánālabhya ⁺yájate nā́sya ⁺devamanuṣyā́ iṣṭā́ya śrád dadhaty. apáḥ praṇayaty. ā́po vái śraddhā́. śraddhā́m evā́lábhya yajate*「『信を置くこと』（信じる心）を捕まえないで祭式を行うならば，神々と人間たちはこの者の祭式の効果に信を置かないのだ。水たちを［東に向かって］連れて行く（水を… 運ぶ）。水たちは『信を置くこと』なのだ。他ならぬ『信を置くこと』を捕まえてから祭式を行うことになる」。Köhler p.27ff. はソーマ祭の潔斎 *dīkṣā́-* におけるいわば禊ぎとの関

連から説明している。本稿の筆者は「契約の水」の存在を強調したい: "Vasiṣṭha und Varuṇa", Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik, Erlanger Tagung 1997 (Wiesbaden 2000) 159f. n.39。五火二道説などとの関連では，宇宙を循環する不死の水，葬送儀礼における水との関連も重要である。BĀU VI 2〜ChUp V 3−10に語られる「五火二道説」の，「どのようにして，水たちが人のことばを話すようになるのか」は確立した *śraddhā́-* と水たちとの同置（神々がかの世界で献供する，宇宙を循環する永遠の水たち）を前提としている（→1.4.)。
２）*śraddhā́-* と不滅 *ákṣiti-* との同置: JB，TB，KauṣB，JUB，ChUp，VādhAnvākh。KÖHLER は p.51 以降で輪廻説との関連で議論し，Glaube（信仰，信心）に近い中身を想定している。"Glaube" ではあるとしても，理論，理念に対する確信であり，例えば唯一神への信仰ではない。「祭式と布施の効力」を巡る祭式解釈理論に着目する必要があり，当然，上述の宇宙を循環する「不死の水」との関連は密接である。
３）*śraddhā́-* と *tápas-*「努力のもつ熱力，苦行」(→1.3.)[13]，*śraddhā́-* と神々（祭式を通して，天界の神々や祖霊に食料を贈る文脈に *śraddhā́-* が役割を果たすことはないか)，KÖHLER の解釈がともすればそれに偏りすぎた *śraddhā́-* と報酬・布施（*dákṣiṇā-*）との関係，などもあらためて具体的に確認する必要があろう。

1.7. *śraddhā́-* の語は Upaniṣad，Sūtra 文献では特に積極的に論じられることはない。「祖霊祭」を意味する *śrāddha-* が *śraddhā́-* からの派生形（Vr̥ddhi 形成）であることに疑いはない。しかし，どのような経路を通じて，「信（頼）に属する，に由来する」から「祖霊祭」の意味が展開したのかは不明である。KÖHLER p.50 は BÖHTLINGK が引く伝統的解釈を基に，「祭官に喜んでお布施する気持ち（Spendefreudigkeit）を伴って」祖霊の代理である婆羅門に食事を与えること，に由来すると考えているようである。→1.6.1.。

1.8. 古典サンスクリット，叙事詩，ヒンドゥー教文献においても，*śraddhā-* とその動詞形とは，意味内容自体には変化を被らずに用いられている。８.に

13　HACKER（→８.）443, 457ff., 475, 原『古典インドの苦行』，春秋社1979，49参照。

挙げる HACKER，HARA，BHATTACHARYA の研究を参照されたい。[14] 初期仏典には，Pāli *saddahati*「～（Akk.）を信じる」(→2.2., cf. 1.1.1.)，*saddhā-*「信心」，*saddha-*「信心深い」 ＜ **śrāddha-*，*asaddha-*「信心の無い」が普通に用いられている。[15]

2. アヴェスタ

2.1. 古アヴェスタ語には，語根名詞（行為者名詞）***zrazdā-***「信を置く，信頼している」が，新アヴェスタ語には，その否定形 *azrazda-*「信を置かない，信じない［者］」が見られる（*azrazdāi* Nirang. 17 ＝ Puršis. 6，あるいは *azrazdā-* の Dat.「不信心のために」)。KELLENS (→８.) 205－208 参照。この語はインド・ヨーロッパ祖語に置き換えれば，**k̂réd-d*^{h}*eh*$_{1}$*-* の語頭の子音が，おそらく「心臓」を意味する **ĝ*^{h}*r̥d-*（＞古アヴェスタ語 *zər*^{ə}*d-*，新アヴェスタ語 *zər*^{ə}*δ-aiia-*，ヴェーダ語 *hŕ̥d-*，*hŕ̥d-aya-*）の影響で代置されたものに遡ると解される：Yasna 31,1（ザラトゥシュトラのことば）*tā və̄* ^{u}*ruuātā marəṇtō* | *aguštā vacå̊ sə̄nghāmahī* | *aē*^{i}*biiō yōi* ^{u}*ruuātāiš drūjō* | *aṣ̌ahiiā gaēθå̊ vīmər*^{ə}*ṇca*^{i}*tē* | *at̰cīt̰ aēibiiō vahištā* | *yōi* **zrazd**$_{a}$**å̊** *aŋhən mazd*$_{a}$*āi*「君たちのそれらの掟（決まり）を想起しつつ，我々は，この者たちにとって，聞かれたことのないことばたちを公言する，虚偽に属する掟たちによって真理に属する生命たちを破壊する［この者たちにとって］。だが，マズダーに信を置くことになる者たち，この者たちにとっては，［それらは］最善である」。

その最上級に当たるのは，語根に最上級の接尾辞を付して作られた ***zrazdišta-*** である：Yasna 53,7（ザラトゥシュトラのことば）*at̰cā və̄ mīždəm aŋhat̰* | *ahiiā*

14　HACKER はヴェーダ文献をも改めて検討している。HARA，HACKER は *śráddhā-* と *bhakti-*「捧げること」とが，働く次元を異にする別概念であることを明確に指摘している。ヒンドゥータントリズムにおける両概念については，引田弘道『ヒンドゥータントリズムの研究』(1997) 31，87，206，346，348，357，463 などを参照のこと。

15　仏教における「信」とその隣接概念（*śraddhā-*，*prasāda-*，*adhimukti-*，*bhakti-* など）に関する研究文献は膨大なものに上ると思われる。藤田宏達「原始仏教における信の形態」北海道大学文学部紀要第6号 (1957) 65－110，『原始浄土思想の研究』1970，586ff.，『浄土三部経の研究』2007，474ff.，414，中村元他編『仏教思想11　信』1992 などを参照されたい。

magahiiā | *yauuat̰ āžuš zrazdištō* | *būnōi haxtaiiå* | *paracā mraocąs aorācā* | *yaθrā ma^{i}niiuš drəguuatō anąsat̰ parā...*「だが，君たちには，この献納に対する報酬があることになる。最も信仰篤い者は *āžuš*（ἅπ. λεγ. 意味不明）を遠ざけることになる，太腿の根底において，出たり入ったりしながら，欺く者の精神が消えて無くなったそこにおいて。...（？？）」

Suffix *-ti-*による名詞（行為の実体詞）***zrazdā^{i}ti-***「信を置くこと，信頼すること」の用例は，例えば，次のザラトゥシュトラの言に見られる：Yasna　43,11 *spəṇtəm at̰ θuuā* | *mazdā mə̄ṇghī ahurā* | *hiiat̰ mā vohū* | *pa^{i}rī.jasat̰ manaŋhā* | *hiiat̰ xšmā uxδāiš* | *dīda^{i}ŋ́hē pa^{ou}ruuīm* | *sādrā mōi sąs* | *mašiiaēšū zrazdā^{i}tiš* | *tat̰ vər^{ə}ziieidiiāi* | *hiiat̰ mōi mraotā vahištəm*「神聖な者と，そこで，君［のこと］を，『智慧（理性）』よ，私は思う，主よ，ひとが私に善い思考をもって仕えるとき。君たち（アフラ・マズダーと「神聖なる不死の者たち」）による言明たちによって，私が原初のことを感得するならば，人間（死すべき者）たちにおいては，信頼を置くことは，私には苦痛を与えるものとして立ち現れる。君たちが私に最善であると言うこと（もの），それが［私によって］為されるべきである」。ヴェーダのメカニズム至上主義には見られない個人の「信頼」という概念が注意を惹く。新アヴェスタ語にも用例がある。

2.2. 動詞語形は新アヴェスタ語に見られる：Yt 9,26 *yā mē daēnąm māzdaiiasnīm zrasca dāt̰...*。*dāt̰* には Aorist Injunktiv（時制を越えた現在，または，過去の確認）または Konjunktiv の可能性があり，Akk. 支配の構文解釈が難しい。Zaraθuštra の庇護者 Vīštāspa の妻にして妹ともいわれる Hutaosā を修飾する文である。文字通り置き換えると：「マズダーを讃える私の宗教を，信を置く／置いた／置くべきである［彼女］，そして，……［する彼女］」。*zras-ca* を Lok. に解する可能性もあるが，[16] インド・イランを通じて *-as-* 語幹の Lok. は全て *-i* を伴う。*zraz-dā* が「（を）信ずる」の意味で一語に発展していたとも考えられる。インドでも，パーリ語の Akk. 支配に同様の展開が推定される（→ 1.8., cf. 1.1.1.）。

16　Kellens（→８．）207f. 参照。

2.3. 古ペルシャ語には直接の典拠はなく，アラム語の中に古ペルシャ語由来の語として**drazdā-* が回収される。ただし，“wenn ‘ergeben, fromm’（Hinz NÜ 92f., mit Lit. dagegen Sz...）”（Mayrhofer EWAia II 663 s.v. *śraddhā́-*）。

3．ラテン語においては，「（人・物を）信じる，信頼する」の意味で *crēdō*（1人称単数 Aktiv），*crēdere*（不定詞）が Ennius（前239－169），Plautus（－前184）以来広く用いられる。一人称動詞形 *credo* が，英語に名詞「信仰，信条」の意味で借用されるようになったのは1200年頃からとされる。過去分詞から *credit* が用いられるようになったのは16世紀という。名詞派生形は特に用いられないようである。

crēdō は $^*\hat{k}r\acute{e}d$ ＋$^*d^heh_1$の活用形による。印欧祖語における$^*d^heh_1$の現在語幹は 3. Sg. $^*d^h\acute{e}\text{-}d^hoh_1\text{-}ti$ であり，インド・イラン語派はこれを直接引き継ぐ。西ゲルマン語派に属する英語 *do*，ドイツ語 *tun*，ドイツ語の弱変化過去形 *-te* も最終的にはこの語幹に遡る。ギリシャ語は *-í-* による Reduplikation に移行：$t\acute{i}t^h\bar{e}\text{-}mi$。ラテン語は Simplex には *faciō*（*-k* による拡張［由来不明］，**-i̯*-Präs.， フランス語 *faire* 等はこれに遡る）を用いるが，複合語には，本来の重複現在語幹の跡が残っている：語中の変化を経て，*re-ddō*，*re-ddere*，*ab-dō*，*ab-dere*（**re-di-dō*，*ab-didō* から Synchope ± Geminata の単子音化），2. Pl. Iptv. *inde*（Plautus）。いずれも弱語幹形から母音幹活用（thematisch）に移行，すなわち，**-də-* ＞ **-da-*＞［アクセントのない音節で］*-de-* の経過を辿ったものである。$^*\hat{k}r\acute{e}d$ と$^*d^heh_1$の間の音韻変化は，語中の変化によらない urital. **kred* ＋*þē*＞**cresþō*＞**crezdō*，または，語中の変化を仮定して，$^*\hat{k}r\acute{e}d\text{-}d^{h\circ}$ ＞$^*\hat{k}r\acute{e}dzd^{h\circ}$ ＞voralat. $^*krezd^{h\circ}$ ＞$^*crezd^{\circ}$ ＞$cr\bar{e}d^{\circ}$（一般に $^*\text{-}zd^{(h)}\text{-}$ ＞lat. *-st-* であるが，他の複合語の *-dō*，*-dere* に倣い，元に戻されたもの）と説明される。前者は Sommer Handbuch der lateinischen Laut- und Formenlehre（^{2}1914）242f. が可能性として挙げる見解であり，後者は M. Leumann Lateinische Laut- und Formenlehre（1977）168 が採る解釈である。いずれにせよ，*crēdō*，*crēdere* は *faciō* によらない固定された形から出発しており，インドで *śrád* が活用形を示さず，動詞前接辞として機能していることと符合して，由来の古さを示す。

4．ケルト語派：古・中アイルランド語 *cret-im*「私は信ずる」：$^*\text{-}dzd^{(h)}\text{-}$＞

vorkelt. *-*zd*^{h}- ＞ -*t*-（現代アイルランド語 -*d*-）による，1. Sg. *no-cretim*，3. Sg. *nad-id-chreti*，rel. *cretes*，*crettes*，*creites* など。コーンウォール（ケルノウ）語 *cresy*，中期ブルトン（ブレイス）語 *cridiff*，現代ブルトン語 *kridi*，*kredi*。
―― 名詞（中性）: 古・中アイルランド語 *cride*「心臓」（現代アイルランド語 *croidhe*），ウェールズ（カムリ）語 *craidd*「中心，心臓」，ブルトン語 *kreiz*「中央」＜ **ḱradjo-*（**k̂radi̯o-*, Pedersen Vergleichende Grammatik der keltischen Sprachen I, 1909, 69, Lewis-Pedersen A Concise Comparative Celtic Grammar, 1937, 15）[17]，おそらく＜ **k̂red-ih*$_{2}$*ó*-。

5．インド・ヨーロッパ祖語における事情概観

5.1. 名詞: **ĝ*^{h}*réd-d*^{h}*eh*$_{1}$-? ＞ 古アヴェスタ語 *zrazdā*-「信を置く，信頼している」，あるいは，**k̂réd-d*^{h}*eh*$_{1}$- から語頭子音を変換？（→5.5.）; **k̂réd-d*^{h}*h*$_{1}$*-éh*$_{2}$- ＞ 古インドアーリヤ語 *śraddhā́*-「信を置くこと」（**k̂réd-d*^{h}*eh*$_{1}$-「信頼している」もありうるか，→1.2.）。

5.2. 動詞: 印欧祖語 **k̂réd* ＋ *d*^{h}*eh*$_{1}$，現在語幹 -*d*^{h}*é-d*^{h}*oh*$_{1}$-/-*d*^{h}*é-d*^{h}*h*$_{1}$-「心臓？／信念？を定める」＞それぞれの活用体系に。

5.3. **k̂érd-/k̂r̥d-*，それとも，**k̂réd-/k̂r̥d-*?: Schwebeablaut[18] は想定しがたい。Schindler Sprache 25（1979）58bf.（Rz. Kellens Nom-racine）は -*s*-Stamm を想定し，**k̂érd-s-* ＞ **k̂réd-s-* の可能性を挙げる（→注19）。**k̂red-*（Vollstufe II）は古インドアーリヤ語（*śrád*），ラテン語（*cred-*°），ケルト語（**ḱrad-*）に跡づけられるので，印欧祖語に想定される確率が高い。

5.4.「心臓」という意味で現れるのは:
**k̂red-ih*$_{2}$*ó*-(?)　　＞ケルト語（中性），→4.

---

17 Walde-Pokorny Vergleichende Wörterbuch der indogermanischen Sprachen I（1930）423 はアイルランド語形を＜**k̂r̥diom*，その他を＜**k̂rodiom* から導く。

18 Benveniste（特に，Origines de la formation des noms en Indo-Européen, ^{2}1935, 147−173）が想定するような Vollstufe I と Vollstufe II の並存。

*k̂ŕ̥d- ＞ラテン語（中性）cor，cord-is，古教会スラヴ語（中性）srьd-ьce，ギリシャ語（女性）kard-ía，イオニア krad-íē，ヒッタイト語（中性）kard(i)-

*k̂ḗrd- ＞ギリシャ語 kẽr（中性），リトアニア語（二次的に女性）šìrd-ìs，ヒッタイト語（中性）kir(ti)

*k̂ḗrd-i (Lok.) ＞ギリシャ語 Dat. kẽr-i，アルメニア語 sirt (Nom.)

語頭の子音を異にして（中性）：

*ĝʰḗrd- ＞古インドアーリヤ語 -hā́rd- (su-°，dur-°)

*ĝʰḗrd-i (Lok.) ＞古インドアーリヤ語 hā́rd-i (Lok.)

*ĝʰr̥d- ＞古インドアーリヤ語 hŕ̥d-，hŕ̥d-ay-a-，古アヴェスタ語 zərᵊd-，新アヴェスタ語 zərᵊδaiia-，ゲルマン語派：英語 heart，ドイツ語 Herz など

5.5. これらを総合すると，印欧祖語において，「心臓」を意味する語に ①*ĝʰérd-/*ĝʰr̥d-，②*k̂érd-/*k̂r̥d- の中性名詞２語形が復元される。さらに，アップラウト（Vollstufe の実現位置）を異にする ③*k̂réd- が想定されることになる。その際，②から，拡大形ないしは派生形を用いて「心臓」を意味する語が作られていること（ギリシャ語 *-i̯éh₂-，ケルト語派 *-ih₂ó-：「...をもつ，に由来する，属する」？）を重視するならば，*k̂érd-/*k̂r̥d- の背景に，「心臓」と深く関係するが「心臓」そのものとは異なる語彙があった可能性が考えられる。そこに ③*k̂réd-が，もともと心臓に依拠する何らかの精神機能（→1.4.）を謂う語であった可能性が浮上する。すなわち，「信念，確信，信」のような働きが考えられる。

このように仮定すると，②*k̂érd-/*k̂r̥d-「心臓」は ①*ĝʰérd-/*ĝʰr̥d- を，Vollstufe の母音位置はそのまま受け継ぎながら，語頭の子音を ③*k̂réd- に合わせて変えたものと説明できる。

アヴェスタ語 zraz-dā- には，逆方向の平均化がおこり，古インドアーリヤ語の śrád＋dhā から想定されるインドイラン共通祖語 *k̂réd-dʰeh₁- から，語頭の子音を *ĝʰr̥d- ＞イラン祖語 *zr̥d-「心臓」（＞古アヴェスタ語 zərᵊd- などなど）によって変えたものと説明できる。[19]

§5.5.: p.(75) = –564– 補遺 (18.7.2015)

可能性としては，

印欧祖語段階で，連続するまたは一語に合成された（盈階梯の）**k̂erd* + *d^{h}eh$_1$*，例えば**k̂erdd^{h}eh$_1$*-（おそらく**k̂erdzd^{h}eh$_1$*-）に，3（ないし 4）子音連続回避のため，**k̂redd^{h}eh$_1$*-(**k̂redzd^{h}eh$_1$*-) という異形が生じ，これから**k̂red*が抽出された，という想定がやはりあろう。ただし，インド・イラン語派に見られる**ĝ^{h}erd*/**ĝ^{h}r̥d* の語頭子音の起源は未解明のまま残る。

訂正:

śraddhā́-，*crēdō* の語義と語形について (75)

*k̂ŕ̥d- ＞ラテン語（中性）*cor*，*cord-is*，古教会スラヴ語（中性）*srъd-ьce*，ギリシャ語（女性）*kard-ía*，イオニア *krad-íē*，ヒッタイト語（中性）*kard(i)*-

*k̂ḗrd- ＞ギリシャ語 *kẽr*（中性），リトアニア語（二次的に女性）*šird-ìs*，ヒッタイト語（中性）*kir(ti)*

*k̂ḗrd-i (Lok.) ＞ギリシャ語 Dat. *kẽr-i*，アルメニア語 *sirt* (Nom.)

語頭の子音を異にして（中性）：

*ĝ^{h}ḗrd- ＞古インドアーリヤ語 *-hā́rd-* (*su-*°，*dur-*°)

*ĝ^{h}ḗrd-i (~~Lok.~~ L) ＞古インドアーリヤ語 *hā́rd-i* (~~Lok.~~ L) H H Nom.-Akk.

*ĝ^{h}r̥d- ＞古インドアーリヤ語 *hŕ̥d-*，*hŕ̥d-ay-a-*，古アヴェスタ語 *zərᵊd-*，新アヴェスタ語 *zərᵊδaiia-*

*k̂érd-on- ＞ ゲルマン語派：英語 *heart*，ドイツ語 *Herz* など

5.5. これらを総合すると，印欧祖語において，「心臓」を意味する語に ①*ĝ^{h}érd-/*ĝ^{h}r̥d-，②*k̂érd-/*k̂r̥d- の中性名詞２語形が復元される。さらに，アップラウト（Vollstufe の実現位置）を異にする ③*k̂réd- が想定されることになる。その際，②から，拡大形ないしは派生形を用いて「心臓」を意味する語が作られていること（ギリシャ語 *-i̯eh₂-*，ケルト語派 *-ih₂ó-*：「...をもつ，に由来する，属する」？）を重視するならば，*k̂érd-/*k̂r̥d- の背景に，「心臓」と深く関係するが「心臓」そのものとは異なる語彙があった可能性が考えられる。そこに ③*k̂réd-が，もともと心臓に依拠する何らかの精神機能（→1.4.）を謂う語であった可能性が浮上する。すなわち，「信念，確信，信」のような働きが考えられる。

このように仮定すると，②*k̂érd-/*k̂r̥d-「心臓」は ①*ĝ^{h}érd-/*ĝ^{h}r̥d- を，Vollstufe の母音位置はそのまま受け継ぎながら，語頭の子音を ③*k̂réd- に合わせて変えたものと説明できる。

アヴェスタ語 *zraz-dā-* には，逆方向の平均化がおこり，古インドアーリヤ語の *śrád*＋*dhā* から想定されるインドイラン共通祖語 *k̂réd-d^{h}eh$_1$- から，語頭の子音を *ĝ^{h}r̥d-＞イラン祖語 *zr̥d-「心臓」（＞古アヴェスタ語 *zərᵊd-* などなど）によって変えたものと説明できる。[19]

6．リグヴェーダにおいて，心臓に座を占める働きは *krátu-*（＜**krétu-*）「精神力，念力」である（→1.5.）。リグヴェーダの詩は，理念として，頭部にある思考作用によって形成され，心臓に位置する精神の力によって，ことばという形で表明されて実現する。[20] 先に，*śraddhā́-* と思考（*mánas-*）との関係（1.4.），*śraddhā́-* と心臓（*hṛ́d-*，*hṛ́daya-*）との関係（1.5.）に触れたが，リグヴェーダ，古アヴェスタに，思考と心臓とを重ねる表現「心臓によっても思考によっても」が見られる：RV VII 98,2 *utá hṛdótá mánasā*，RV VI 28,5 *hṛdā́ mánasā cid*，Y 31,12 *zərədā-cā manaŋhā-cā*。この場合，心臓には，純粋な思考内容の形成より，実現へ向けての判断（確信）に近い概念が想定されているように思われるが，インド・ヨーロッパ祖語の段階で **k̂red-* がそれに当たる概念を表していた可能性がある。いずれにしても，**k̂réd* ＋*dʰeh₁* には，元々，理念的思弁的色彩をもった「確信，信念，信」の意味が想定される。*crēdō* の語から連想されるような，人格神（とその理念）に対する帰依，献身の意味は，この語自身の語彙内容に属していたものではなく，文脈，使用環境に起因するものである。

7．最後に，簡単に造語法上比較すべき語彙を列挙して報告を終えたい。

manas-/mans-/mn̥s-* ＋*dʰā*：1）mn̥s-dʰeh₁-* ＞古インドアーリヤ語 *medhā́-*（一般に）「智慧」，アヴェスタ語 *Mazdā-*（Nom.Sg. *-s* によって男性名詞化，＋*Ahura-*「主，首長」）；――2）**máns* ＋ *dʰeh₁*：形容詞 **mn̥s-dʰh₁-ró-/*mans-dʰh₁-ró-* ＞古インドアーリヤ語 *médhira-* 〜古アヴェスタ語 *hu-mązdra-*，新アヴェスタ語 *mązdra-*；動詞「何かに（：Akk.）思いを向ける」[21] 古アヴェスタ語 *mən̨-cā*... [*mąz*]*dazdūm* Y 53,5, *mazdå̊ŋhō.dūm* Y 45,1, Inf. 古アヴェスタ語 *mən̨-cā daidiiāi* Y 31,5, cf. 古インドアーリヤ語 *mandhātár-*（パーリ語 *Mandhātā*）。

---

19 Kellens（→８.）207f. 参照。*zras-ca* は *-dā-* の直前の形の一般化から説明できる。**k̂réd-dʰeh₁* ＞**srazdā* から，*z–z–d* に同化したという可能性もあり得る。Schindler が想定する *-s-* 語幹 **k̂érd-s-* ＞ **k̂réd-s-* は印欧祖語における2つの異なった再建形の存在を説明しない。

20 Witzel-Gotō-Dōyama-Jažić Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis. Verlag der Weltreligionen, Frankfurt/Leipzig 2007, 649 : zu I 105,15, 813 : zu II 35,2（Gotō による）参照。

21 **máns* を Akk. と解すると，もう一つの対象の Akk. の解釈に困難があるかも知れない。目的，到達点の Akk. と説明できるであろうか。**máns* に語根名詞 **mán-* の（領域の）Gen. を考えるべきか。

*mi(H)s-$d^{h}eh_{1}$- ＞古インドアーリヤ語 _mīḍhá-_「報酬」，ドイツ語　_Miete_「家賃」; *mi̯(H)és-$d^{h}eh_{1}$- ＞古インドアーリヤ語 _miyédha-_ ＝アヴェスタ語 _miiazda-_「祭礼の食事」。*méi̯(H)es- ＞古インドアーリヤ語 _máyas-_ ＝新アヴェスタ語 _maiiah-_「喜び，元気」に基づく。

*h_{2}i̯éu̯s-$d^{h}eh_{1}$ ＞アヴェスタ語 _yaož-dā_「生命力を定め置く」。[22]

8．_śraddhā́_-についての文献拾遺

Hans-Werbin Köhler Śrad-dhā- in der vedischen und altbuddhistischen Literatur. Diss. Göttingen 1948, hersg. von K. Janert（Wiesbaden 1973）.

Rz. M. Hara IIJ 19（1977）105－108.

Gouriswar Bhattacharya Studies in the Concept of Śraddhā in Post–Vedic Hinduism. Diss. Basel 1971.

P. Hacker WZKSO 7（1963）151－189 = Kl.Schr. 437－475 “śraddhā”.

M. Hara IIJ 7（1964）124－145 “Two Sanskrit religious terms _bhakti_ and _śraddhā_”.

J. Kellens Les noms-racines de l’Avesta（1974）205－208.

S. Scarlata Die Wurzelkomposita im R̥gveda. Wiesbaden 1999.

松濤誠達「古典インドにみる信仰―特にヴェーダの祭祀との関連において―」，中村元他編『仏教思想11　信』1992，233－248 ＝『古代インドの宗教とシンボリズム』2006, 59－71.

22　あるいは，「生命力（からその部分）を定め置く」(Gen.)。

Zur Form und Bedeutung des Wortes *śraddhā́-* und *crēdō*

Toshifumi Gotō

Auf dem Bericht anläßlich der 48. Tagung unserer Gesellschaft, Sendai 28. 5. 2005, fußend, lassen sich das Verbum *śrád* + *dhā* ‘Vertrauen, Überzeugung legen, bestimmen’ und das Nomen *śraddhā́-* ‘Vertrauen, Glaube’ im Altindoarischen in Form und Gebrauch kurz überprüft: 1.1. verbale Formen von *śrád dhā*: 1.1.1. im R̥gveda, *śrád kar/kr̥* usw., 1.1.2. in den Yajurveda-Saṁhitās und Brāhmaṇas; 1.2. Nomen *śraddhā́-*: 1.2.1. RV X 151, Lied an die Śraddhā, 1.2.2. *aśraddhá-*, *śraddhivá-*, 1.3. *śraddhā́-* und *satyá-* ‘das Wahre’, 1.4. *śraddhā́-* und *mánas-* ‘Denken’, 1.5. *śraddhā́-* und *hŕ̥d-*, *hŕ̥daya-* ‘Herz’, 1.6. *śraddhā́-* in den Brāhmaṇas, 1.7. −1.8. weitere Entwicklungen bis in die hinduistitsche Literatur und in pāli *saddahati*.

Dann werden die altiranischen（avestischen）Formen und Belege überblickt: 2.1. aav. *zrazdā-* ‘vertrauend’ Y 31,1, jav. *azrazda-*（oder *azrazdā-*）, aav. *zrazdišta-* Y 53,7, *zrazdāⁱti-* Y 43,11, 2.2. jav. *zrasca dāt̰* Yt 9,26, 2.3. ap. **drazdā-* im LW im Aramäischen.

Lateinsich *crēdō* ‘vertraue, glaube’ und die keltischen Formen werden besprochen（3., 4.), und die Sachlage wird bis ins Urindogermanische verfolgt: 5.1. Nomen **ĝʰréd-dʰeh$_1$-* > aav. *zrazdā-*, **k̂réd-dʰh$_1$-éh$_2$-* (auch **k̂réd-dʰeh$_1$-?*) > aia. *śraddhā́-*, 5.2. Verbum **k̂réd* + *dʰeh$_1$*, Präs.-Stamm *-dʰé-dʰoh$_1$-/-dʰé-dʰh$_1$-*, 5.3. **k̂érd-/k̂r̥d-* und **k̂réd-/k̂r̥d-*, 5.4. Wörter für ‘Herz’ :**k̂red-ih$_2$ó-*, **k̂ŕ̥d-*, **k̂ḗrd-*, *k̂ḗrd-i*, **ĝʰḗrd-*, **ĝʰḗrd-i*, **ĝʰr̥d-*, 5.5. **ĝʰérd-/*ĝʰr̥d-* und **k̂érd-/*k̂r̥d-* für ‘Herz’ und **k̂réd-*.

Für das Wort **k̂red-* läßt sich ursprünglich die Bedeutung einer im Herzen sitzenden Geistesfunktion vermuten, die, auf Verwirklichung bezogen, für Urteil, Überzeugung bzw. Entscheidung zuständig ist. Am Schluß werden vergleichbare Bildeweise **manas-/mans-/mn̥s-* + *dʰā*, **mi(H)s-dʰeh$_1$-*, **h$_2$i̯éu̯s-dʰeh$_1$* angegeben（7.), und eine kurze Liste der Literatur zu *śraddhā́-* wird verzeichnet（8.).